《VOL.126》2023年11月発行

What's up, OITA!

世界で活躍する県人会員と留学生ＯＢ、大分県関係者の皆さま方に、大分の「今」をお伝えします。

JICA海外協力隊 ガーナ・ラオスへ！

佐藤 智隆さん
（派遣国：ガーナ）

宮脇 好和さん
（派遣国：ラオス）

JICAボランティア？

開発途上国からの要請（ニーズ）に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣されるボランティア事業。

○青年海外協力隊（海外協力隊）：
　幅広い経験・技能等で応募可能

○シニア海外協力隊：
　一定以上の経験・技能等が求められる

https://www.jica.go.jp/volunteer/

JICA海外協力隊が派遣前のあいさつとして企画振興部審議監を表敬訪問しました。今回の派遣で大分県からは佐藤智隆さん、宮脇好和さんの２名が出発します。佐藤さんは青年海外協力隊としてガーナ共和国に派遣され、カーエアコンの設計等に携わっている現職の知識を活かし、現地の技術学校で冷蔵・空調技術に関する授業などを行います。宮脇さんはシニア海外協力隊としてラオス人民民主共和国に派遣、社会教育の専門知識と経験をもとにルアンパバーン国立博物館学芸員として活動されます。

県内のニュース

10月に起こった県内の出来事やニュースについてご紹介します。

- 「ツール・ド・九州」日田市を舞台に大分ステージ　迫力レースに沿道は興奮
- 石仏パーマ姿、石畳のランウェイ優雅に　臼杵市で観光イベント
- 竹工芸家の公開制作やワークショップも　大分県立美術館で「竹会」
- 竹田市で流しそうめんの距離ギネス世界記録を達成　約４キロ、１回目で成功
- 別府八湯アンバサダーの認定制度スタート　学科と実技…無料モニターを募集
- 別府市のモスクで一般開放イベント　集団礼拝など見学、日本人ムスリムらの講演も
- 知的財産について学べるアニメ　大分県立芸文短大生が高校生向けに制作開始
- 伊方原発の事故想定、大分県庁などで防災訓練　愛媛・山口県と情報共有確認
- アサギマダラ、姫島村でひと休み　飛来確認、観光客らが楽しむ
- スーパーGT第7戦の開催を前にGTA坂東代表とオートポリスの金子常務が大分県庁を表敬訪問

News from Tsukumi

津久見市からのお知らせ

津久見市
観光協会
ホームページ

うみたま体験パーク つくみイルカ島

イルカパフォーマンスをはじめ、ボートに乗ってイルカにえさやりをしたり、一緒に泳ぐ体験ができる、体験型施設「つくみイルカ島」。
日本で唯一の「プッシング」という技にも挑戦できます！

○営業時間：10:00～16:00(時期により延長・休業あり)
○入 場 料：大人 1,300円 子ども 800円 幼児 650円 ※体験プログラムは別途料金
○場　　所：津久見市大字四浦2218-10

保戸島

「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産100選」に選ばれるほど、美しい景観の「保戸島」。
市内中心部から船で、25分ほどの場所にあり、迷路のような路地を散策するなど、ゆっくりした時間を楽しむことができます。

ひゅうが丼

昔、遠洋漁業で盛んだった保戸島の漁師が考案されたとされる「津久見ひゅうが丼」。甘いごまだれと新鮮なマグロがアツアツのご飯にピッタリ！毎年夏には、食キャンペーンを開催しています。

四浦半島 豊後水道河津桜まつり

つくみイルカ島周辺にある、約5000本の河津桜が毎年2～3月に開花し、多くの見物客が県内外から訪れます。それに合わせて津久見特産のみかん等を販売し、お祭りを盛り上げます。

機関庫の戸締まり

“日本は聖地です”・・・と言われたらちょっとヤバい人かもと思うかもしれませんが、ある人たちにとって、日本はまさに聖地です。そのある人たちとは、「アニメオタク」です。日本各地に、オタクにとって「聖地」と呼ばれる場所がたくさんあります。その場所を巡る旅、「聖地巡礼」も日本観光のかけがえのない文化となってきています。大分も例外ではありません。今回の「What’s Up, Oita!」では、「進撃の巨人」、「すずめの戸締まり」等のアニメ作品の聖地を一緒にバスでツアー、いや、巡礼しましょう！チャンネルはそのまま！

最初に巡礼するのは豊後森機関庫。「きかんしゃトーマス」を見たことがある人なら、たぶん「扇型機関庫」は見たことがあるでしょう。扇形機関庫とは、転車台（列車の方向を切り替える台）を中心に扇形に車庫が並んだものです。蒸気機関車の時代に列車の整備をするために使われた機関庫でしたが、もうそのほとんどが老朽化し、放置されています。

「トーマスのお家とアニメはどういう関係が？」とお思いでしょう。でも、関係が大いにあるのです。豊後森機関庫は二つのアニメ作品に登場しました。一つ目は、「ラブライブ！サンシャイン!!」に登場するバンド、「Aquors」の3枚目のシングル「Happy Party Train」のMVの舞台としての登場です。

MVでは機関庫がかつての輝きを取り戻しており、その光景も、僕たちが乗っていたバスの車内テレビで見ました。でも、機関庫に到着したら、もちろん、廃墟でした。しかし、放置されているというわけではありません。玖珠町の努力のおかげで、（もう動かない）機関車、乗車できるミニトレイン、大型鉄道模型、博物館などが敷地内に置いてあり、近代化産業遺産となっています。そして、どこにもつながっていない扉もなぜか設置されています。

なぜこんな「どこでもないドア」みたいな物がここに？と思いますが、それは、機関庫が登場した二つ目のアニメ映画、新海誠監督の「すずめの戸締まり」の影響で再現されたからです。しかし、「ラブライブ！」と違って、今回の登場は機関車と直接の関係はありません。作中に登場するのは廃墟と化した温泉街で、奇妙な円形の外観をした建物、水に覆われた地面、そしてその真ん中にある扉。物語冒頭のロケ地は大分や宮崎がモデルになっているのでは？という噂もあり、作中の建物も九州で唯一残っている扇型機関庫である豊後森機関庫がモデルになっているのではないかと考えられます。やはり、これだけの歴史を持つ機関庫は、巡礼する価値があります。

それに、玖珠初心者の人にとっては訳が分からないかもしれませんが、中に入って歩ける鯉のぼりもあります。

最高。

©諫山創／講談社

進撃の日田

豊後森機関庫への旅のあとは、大分県が生んだアニメのひとつ、『進撃の巨人』のゆかりの地を巡る旅に出発しました。世界最大のヒットアニメのひとつである『進撃の巨人』の作者が、山の中の小さな町、日田市の出身であることは意外ですよね。ですが、『進撃の巨人』が存在するのも日田のおかげかもしれません。

日田は四方を山に囲まれています。『進撃の巨人』の作者、諫山創は少年時代、そのそびえ立つ山の向こうにある外の世界が気になっていたのではないでしょうか。その好奇心は、そのまま、『進撃の巨人』の有名な壁と、その向こう側を目指す主人公をひらめくことにつながりました。

しかし、その高い壁(山)を乗り越えた後も、主人公も諫山氏も出身地を忘れることはありませんでした。日田市では、『進撃の巨人』関連の物や場所をたくさん目にします。僕たちが最初に訪れたのは「進撃の日田カフェ」でした。そこで待っていたのは本物の進撃の…弁当でした。お弁当には作品をモチーフにしたメニューや日田やきそば、からあげなど日田の郷土料理がぎっしりと詰まっていました。

満腹になったあと、日田駅に立ち寄りました。日田駅には『進撃の巨人』 ファンみんなが大好きな『進撃の巨人 リヴァイ兵士長像』があります。そこで「進撃の巨人in HITA」アプリを使って、巨人がHITAのモニュメント（自分が「I」の位置に立つ）を叩き潰すAR写真を撮りました。現実世界実際で巨人を見るのはやはり面白かったです。

日田駅の次に訪れた大山ダムには、『進撃の巨人』の主人公3人が巨大メジロン…いや、巨人を見上げる有名なシーンを再現した銅像があります。それだけでなく、ダムや川も美しかったです。

ゆかりの地を巡る旅の最後は、ここでしか見ることができない展示物を集めた「進撃の巨人in HITAミュージアム」へ。漫画の原稿や巨人のオブジェ、諫山氏が『進撃の巨人』を執筆した時に使用した2つの机などがありました。しかし、このミュージアムは奇妙なことに、産地マーケットと隣接しています。恐ろしい巨人とおいしい果物。変な組み合わせですが、ゆかりの地では何でもありです。

アートとの出会い
～Art Fair Beppu 2023～

９月23日から25日の間、『Art Fair Beppu 2023』が大分県別府市で開催されました。私は25日の最終日、このアートフェアを訪れました。これが私にとっての初めてのアートフェア訪問で、事前にプロジェクトの概要を見ましたが、具体的な展示作品が分からなかったのですが、わくわくして行きました。

会場は別府国際観光港、山田別荘、清島アパートの3か所で、訪れた人々は、それぞれの場所が持つユニークな魅力ある展示スペースを存分に楽しむことができます。

私は最も大きな会場である別府国際観光港の会場を訪れました。入り口で展示ブースの案内を見ると、今回のアートフェアで個人やギャラリー、合わせて40組ほど出展しており、大分県内だけではなく、海外からのアーティストやギャラリーも参加していたということがわかりました。中には、国際的に活躍するアーティストのトム・フルーインと西野達も特別ゲストとして招待され、本アートフェアで作品を展示しました。絵画、撮影、彫刻、工芸品などさまざまな作品は目の前に広がり、アートに詳しくない私には、知識不足だなと感じました。

↑中田 愛美里　彫刻作品

↑SIMON 絵画、落書

↑古川 諒子 絵画作品

↑長谷川 絢 竹工芸品

↑前田 亮二　染物

アートとの出会い
～Art Fair Beppu 2023～

通常のアートフェアはギャラリーでアートがメインに展示されますが、今回のアートフェアはアーティストが主体となって作品を展示販売するという形式であるのが大きな特徴です。来客はアーティストと直接交流ができ、彼らの創作意図、制作体験などを聞かせてもらうことができ、作品に興味がある場合は、直接購入することもできます。

展示された作品はそれぞれの特徴がありますが、ここでは一部の作品の写真を掲載させていただきます。また、同フェアの本開催は2025年に予定されており、今回はその土台を固める段階の開催だそうです。

関連イベントとして、別府市は2022年から、半年ごとに1組のアーティストを招待し、4年間で8つの作品を別府市内各所に制作・設置するというアートプロジェクト「Alternative-State」をスタートさせました。このイベントの第3作品として、本アートフェアにも出展したアメリカ出身のアーティスト、トム・フルーインが、日本で初めて作品を制作しました。その作品はフルーインの代表的なシリーズ『ウォータータワー』の10作目です。色とりどりのステンドグラスのようなこの作品は、大分県内で捨てられてしまうアクリルを集め再利用して作られました。日の光が当たれば、この彫刻はあたかも万華鏡のように彩り、訪れた人を楽しませます。

別府北浜公園で設置されたトム・フルーイン（Tom Fruin）の作品『ウォータータワー10：別府市、2023』

↑衣 真一郎　絵画作品

↑西野 達　作品

WHAT'S UP,OITA!

왓츠업, 오이타!

2023年 11月(多言語版 第86号)

(山田別荘)

～アーティストに会って、交流し、活動を支援する～

Art Fair Beppu 2023 別府市

『アートは私たちの心を豊かにします。常識を疑い、問いを生むアートは、私たちの考え方や物の見方を自由に解き放つ力を持ちます。(公式パンフレット抜粋)』
別府の混浴温泉世界実行委員会は、9月23日から3日間「Art Fair Beppu 2023」を開催しました。美術・映像・音楽・パフォーマンス・工芸など多様なジャンルの創造者を日本国内に

(遠藤 薫)

とどまらず、海外からも招待し、展示会場で作品を公開しつつ販売するこのイベント、今年は2025年度の本開催に向けたプレ事業として開催されました。「Art Fair Beppu 2023」の特徴は「出品アーティストは原則会場に常駐する」という点ですが、このおかげで来場者が単に作品を観るだけでなく、主体的に参加したアーティストと直接交流をしながら、彼らの思いや未来への眼差しを近くで触れることができ、イベント終了後に良い評価を受けました。

(清島アパート)

会場は「別府国際観光港 旧フェリーさんふらわあ乗り場」、「山田別荘」、「清島アパート」の3会場ですが、それぞれ「過去にフェリーが寄港していた港のターミナルビル」、「約90年前に建てられた温泉旅館」、「アーティストが居住・制作のための環境として活用するスペース」であり、実は展示のための場所ではありません。しかし、その場所が持つ魅力に多彩な作品が馴染んで、独特で新鮮な展示空間を作り出し、他のアートフェアでは体験できない雰囲気で作品を堪能することができました。個人的には、これもまた「Art Fair Beppu」ならではの特徴ではないかと思います。

(東 智恵)

「来場客」は会場に常駐しているアーティストに作品について直接聞くことで、より深く作品を理解することができ、「アーティスト」は作品や実現したいプロジェクトのプランを販売し、活動や将来を支援してもらうことができ、「事務局」は将来性が期待できる国内外の気鋭のアーティストを発掘することができるこのイベントは、別府市が文化的社交の場として成長することを目指し、来年にも開催される予定ですので、ぜひ一度足を運んでみてください。(※入場有料・巡回バスあり)

WHAT'S UP,OITA!

왓츠업, 오이타!

2023年 11月(多言語版 第86号)

特別インタビュー

写真作家 ソン・ソグ Seok-woo Song

今回唯一の韓国人アーティストとして、韓国・ソウルをベースに活動している「ソン・ソグ」さんが参加しました。山田別荘で公開された彼の作品は少し寂しそうに見えますが、同時に癒してくれる気もします。アーティストと作品について詳しい話を聞こうと、対面インタビューを行いました。

――自己紹介をお願いします。

写真を媒介とした作業をしているソン・ソグと申します。主に社会的関係の中で、人が他人と築く関係に関心を持ち、体系的な社会構造で社会化されていく特定世代のジェスチャー言語とパフォーマンスを視覚化し、演出する写真作品を作っています。

――写真作業をするようになったきっかけは何ですか。

小さい頃に美術を習ったことがあり、母親がコンパクトカメラを用いてデッサンの練習を手伝ってくれました。その時、カメラと写真に興味を持つようになり、いつの間にか自分も写真を撮るようになって、大学で写真を専攻しました。兵役義務を終えて大学を復学した頃には、私を心から応援してくれる仲間と大学の先生のフィードバックを受け入れて、作品を作ることで自分の人生について考察することができると気づき、本格的に写真作業をするようになりました。

――どんなメッセージを込めた作品を作っていますか。

個人と社会の関係性にフォーカスを当てていますが、人が他人と築く関係について非常に関心を持っているので、人々に影響する「社会的ファンダメンタルズ」を探求する作業をしています。「社会的ファンダメンタルズ」とは、人間が社会化されるにつれ体系的な社会構造の中で生きていくようになることを意味します。私は韓国の青年の姿を写真にする作業を通じて、このような社会的なメッセージを伝えようとしています。

――それについて探求するようになったきっかけはありますか。

義務警察として兵役義務を果たす時、本籍地から遠い地域に配属されて、目に見えない地域・言語差別を受けたことがあります。入隊初期にあったこのような差別でとてもストレスを感じて、人が他人と築く関係について関心を持つようになりました。社会に出てそれほど虚しいと思った経験はしたことがなかったので、作業を始めることに大きく影響されたと思います。

――最も記憶に残る作業は何ですか。

韓国 国立現代美術館 政府美術銀行に所蔵されている白黒の作業「IDENTITY:アイデンティティの思惟(2017)」シリーズの一部作品が記憶に残ります。作家としての初作業を高く評価していただいて、人生と作業への大きな動機付けになりました。この作業は、私が自分自身に向けて「何に向かって走っているのか」という本質的なことを問い、その内容を私ではない対象に感情を投射して配置させたもので、初めて直接企画と準備、演出した初期の個人作業です。

――作品で使われている布は何を意味しますか。

「アイデンティティ」とは、内面の心理で内的自己を発現させるものですが、私は作業で「外的自己」をもっと見せよう

としています。「外的自己」とは、目に見えるとあるオブジェや人物のジェスチャー言語などを意味しますが、そのようなものをより強調するために「布」というオブジェを使用しました。オブジェとして布を選んだ理由は、布は可変的な特徴があり比較的に形を変えやすいので、私の作業を表現するに当たって重要な装置になると思ったためです。また、視覚的な効果をさらに出せるように、布を何枚か使って撮影し、組み合わせる作業を行いました。

――白黒からカラー作業に変えた理由は何ですか。

初期の作業である白黒写真は、作品に登場する人物が一人しかいないので、その人物だけに集中されてしまい、また「白」と「黒」の二色のみ使っていることから、極めて主観的な観点から作品を観るようになります。一方でカラー写真は、人物以外にも作品の背景や人物の格好など、より色々なものに作品を観る人の目線を分散させることができるので、多様なナラティブ（物語）を作られると思い、カラー作業に切り替えました。

――最近はどんな作業をしていますか。

現在作業している演出写真作業の延長線上で、パフォーマンスや「ジェスチャー言語」を使う対象をより具体化する作業や、特定世代を作業の対象にして、社会で有効に働く現実的な話を、非定型的な言語で可視化する作業をしています。「特定対象」とは2030世代より上の世代や、社会観念を持ち、又はそれに関係のある人のことですが、彼らにさらにフォーカスを当てて、造形的な身体言語を話す画像を作りたいと思っています。この作業には、目に見えない感情や記憶を表出させ、視覚芸術媒体としての写真の記録性を活かした、新たな作業を構想することも含まれています。

――今後の活動計画を教えてください。

これからも持続的に、人生と作業に対して同じ態度を持てるような状況をつくりながら、予定している展示の準備をしつつ新しい作業もするなど、様々なプロジェクトをしていきたいと思います。

――作業でどんな目標を達成したいですか。

私の作業が社会的に意義のあるものになれることと、私の作品に出会う全ての人に、新しいものの見方を提示して、共感できる媒体になれることを願っています。また、作品は自分自身でもあると思っているので、これからも私の作品を沢山の人に観てもらえるよう、健康に気をつけて、幸せに、そして地道に続けていきたいです。

――ソンさんの作品が、社会を変えられるといいですね。

そのような影響を与えられたら嬉しいですが、まず今は個人が社会集団に所属されていく時に、私の作品を観て少しでも希望をもらえたり、私が伝えようとするメッセージに気づいて少しでも変化できたりするきっかけになれたらと思います。また、私の作品だけでなく、「写真」というものが人々に大きくて有意味な影響を与えることができる、そんな媒体になれると信じているので、それも知ってもらいたいです。

――大分・別府は初めてですか。

日本が好きで、親しみを感じていましたが、実は今年に入って初めて日本に来ました。４月と８月、そして今回で

WHAT'S UP,OITA!

왓츠업, 오이타!

2023年 11月(多言語版 第86号)

三回目の来日ですが、大分・別府は初めてです。大分・別府について話は沢山聞きましたが、直接来てみて感じたのは、町の雰囲気がモダンでありながら、昔ながらの建物もある、なかなか目にすることのできない新鮮な場所であるということでした。

――今回のアートフェアに参加した理由は何ですか。

私と作品について韓国国内のみならず、日本を含む海外の皆さんに知ってもらうためです。ただ、「アートフェア」は作品の販売がメインとなるものであり、私も作品が販売されることは嬉しいので、アートフェアの企画や趣旨などを十分確認した上で、オファーを受けて参加させていただきました。

――アーティストが常駐するアートフェアは初めてですか。

今回のようにアーティストが常駐するイベントはそれほど多くありませんので、私は初めて経験しました。ですが、常駐することで日本の方々と言語、そして町の文化をより近くで触れながら、身につけることができて、とても魅力的だと思いました。また、私の作品を真剣に観て、作品の主題に関心を持ってくださる方も沢山いらっしゃいましたが、それに関する質疑応答をする中で、韓国と日本の社会的な連帯感が生まれる感じがして良かったです。

――来年の開催に向けて、アドバイスをいただけますでしょうか。

今回のアートフェア参加にあたり、事務局様から通訳や航空、宿泊などのご支援をいただき、また全般的にお気遣いいただいたことに、とても感謝しております。これからも日本国外のアーティストが参加できるように、今回のようなご支援をしてくださると嬉しいです。

ソン・ソグ Seok-woo Song

写真作家

学歴

韓国芸術総合学校 美術院
造形芸術科 芸術専門士
（修士）課程 在学中
弘益大学校 産業芸術大学院
写真デザイン学科 修士課程 修了

個展

2023 The Fourth Wall, DAC Museum, Daegu, Korea

グループ展

2023 A Nameless Microcosm,
Cheonan Museum of Art, Cheonan, Korea
2023 6th Helsinki Photo Festival <Courage>,
The National Museum of Finland, Finland
2023 KYOTOGRAPHIE <KG+SELECT>,
Horikawa Oike Gallery, Japan

受賞歴

2023 Winner, 6th Helsinki Photo Festival
Open Call, HPF, Finland
2023 Winner, 1st ChunMan Art for Young,
Monthly Public Art, Korea
2023 KYOTOGRAPHIE <KG+SELECT>
Competition Award Selected Artist, Japan

所蔵

2023 Photographic Center Northwest
2022 DECK Contemporary Art Photography Centre
2021 Krasnoyarsk Museum Centre Ploshchad Mira
2020 Busan Museum of Art
2019 National Museum of Modern and
Contemporary Art (MMCA)

講義

2022～ 東亜放送芸術大学

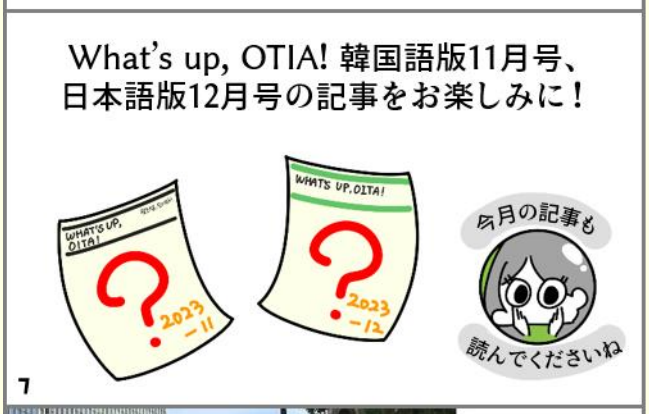
…and so forth.

インタビュー日：2023年９月25日
記事作成：国際交流員 盧知榮

ノジ in おおいた

国際交流員の日常　vol.32

作：盧（ノ・ジョン）知榮
(Noh Jiyoung)



仕事で行った
韓国でしたが、
街を歩くだけで
落ち着く自分は
生粋の(！)
韓国人だなーと
思いました笑

from our Reporters 国際交流員だより

◆アタック・オン・ゴミ箱

韓国国際交流員 盧（ノ・ジョン） 知榮

高校１年生のとき、韓国でオタクではない人もオタクにするほど反響が大きかったアニメがありました。日田市出身の漫画家、諫山創さんの作品「進撃の巨人」です。人気がすごかったので気になった私も一度見ましたが、グロテスクな作品が苦手だったため途中で見ることをやめた記憶があります。
ところが、大分に来て作家さんの出身地が大分県であることを知り、勢いで漫画を最後まで読みました。ストーリーがわかるようになってからは、時々町中で巨人型のゴミ箱を見かけても「あなたにも事情があるよね」と思ったりします。キャラクターの個性溢れる「進撃の巨人」は世界でも大人気なので、個人的には大分県のＰＲにもっと積極的に活用してほしいです！

◆石棺の中身はBBQしない方がいいと思う

アメリカ国際交流員 オースティン・ヴォーン

大分市の神崎に八幡神社があります。昭和７年にその境内で石棺（せっかん）２基が発見されました。月日が流れ、その中にあった４体の人骨が祀られるようになり、祭りも行われるようになりました。僕と彼女は友人にこの「石棺様祭り」に誘われました。こういう地元祭りにはなかなか行く機会がないので行くことにしました。僕と彼女ともう一人の参加者が古代服を着せられ、友人がカラオケを歌っている時、一緒にステージに上がりました。恥ずかしかったけど、楽しかったので行って良かったです。
　そのあと、貸切の海の家でBBQしました。やはり日本のBBQはアメリカのBBQとは全然違います。アメリカではお父さんやおじいさんがみんなの分のステーキを何枚か焼くイメージですが、日本はみんなと一緒に小さな肉や野菜を焼くので、不思議な感じがします。でも、好きな人と祭りに行って、海を眺めて、BBQをしたことはきっとかけがえのない思い出になると思います。

◆中華料理と郷土料理

中国国際交流員 楊（ヨウ・コウカ） 江華

大分市内で中華料理のお店をよく見かけるので、私は時々行っています。しかし、中国と同じ名前の料理でも、必ずしも本場の味と同じだとは限りません。中華肉まんはなぜか甘い、チンジャオロースは全然辛くない、といったところにショックを受けました。日本人の好みに合わせて味付けを変えたのでしょうか。
　大分に来たからには、ご当地のグルメを楽しみたいです。この間、友達がオススメのお店に連れて行ってくれました。そこで「だんご汁」という郷土料理を初めて食べました。だんごといっても平たいうどんのような麺で、野菜などの具がいっぱい入っていて、本当においしかったです。日本の中華料理よりも、「だんご汁」のようなご当地のグルメをどんどん教えてください。

あなたの活動を世界に紹介しませんか？

県人会の活動（懇親会等）や留学生OBの近況など、

世界中の大分県関係者に紹介したい話題をお寄せください！

（様式は任意です）

【記事提供／お問い合わせ先】

国際政策課　担当：生野、中山

【Mail】a10140@pref.oita.lg.jp